

出張報告書

令和 2 年 2 月 17 日

会派名 志誠会
会長 立崎 聡一 様

出張者氏名 近藤 憲治



下記のとおり出張したので報告します。

記

出張期間	令和2年2月13日～令和2年2月14日〔2日間〕						
出張概要	①	月日	2月13日	市町村名	小樽市	会場	小樽市文学館等
		目的	北海道若手議員の会研修				
		テーマ	・小樽雪あかりの路による地域活性化等について調査、ヒアリング				
	②	月日	2月14日	市町村名	旭川市	会場	旭川市障害福祉センター
		目的	健康なまちづくり推進議員連盟 研修会				
		テーマ	・地域コミュニティの紡ぎ直しに関するセミナーに参加。				
	③	月日		市町村名		会場	
		目的	移動日				
		テーマ					
	④	月日		市町村名		会場	
		目的					
		テーマ					
所見	別紙のとおり						
備考							

※所見については、別紙(任意様式)で作成して下さい。

北海道若手議員の会小樽研修

令和2年2月13日（木）15：00～17：00

小樽市文学館及び小樽雪あかりの路会場

参加議員：近藤憲治

座学「小樽雪あかりの路」について

於：小樽市文学館

講師：山口 保 氏

小樽の冬の観光イベントとして定着し、本年22回目を迎えた「小樽雪あかりの路」の創創設者でもある山口保 氏（元小樽市議会議員）から、小樽雪あかりの路が生まれるに至った経緯やこれまでの歩み、今後の展望などを講話があった。

山口氏は1947年、岐阜県生まれ。立命館大学法学部を中退後、京都日仏学院を経て、フランス、スウェーデンに渡航。1975年から小樽に住み始め、市内手宮で喫茶店を営む傍ら、小樽運河保存運動のオピニオンリーダーとなり、その後、新たな観光イベントの必要性を訴え、1999年、小樽雪あかりの路の開始に至った。

小樽雪あかりの路は、小樽市内の運河会場、手宮線会場、朝里川温泉会場の3カ所が主たる会場となる。浮き玉キャンドルやスノーキャンドル、オブジェなどが大勢のボランティアの手作業で会場内の各所に配置され、観光客を楽しませている。開催期間はさっぽろ雪まつりとも重なる形で2月上旬から中旬の10日間前後。来場客数は、第20回48万8千人、第19回51万8千人、第18回54万4千人、第17回49万6千人と年間50万人前後の集客がある。主催は実行委員会形式で市、観光協会、商工会議所、青年会議所、ボランティア団体などで構成されているほか、近年は町内会単位での参加も増えているという。

小樽雪あかりの路の事業理念は、「守りあい、隣り合い、挨拶しあう愛」とのことで、ろうそくの灯りを途絶えさせることなく、ともし続けることで観光客へのおもてなしという部分だけでなく、地域住民のつながり、絆を深めていきたいとの狙いもあるようだ。小樽雪あかりの路の名称の由来は、伊藤整の「雪明りの路」にちなんでいるとのこと。コンセプトとしては、①時代が移ろいながらも守るべきもの、伝えるべきものを次の世代へ受け継ぐということ「時代が変わっても、不変なもの～を大切にしたい」②高度経済成長期に主要産業が行き詰まり「斜陽都市」と呼ばれた小樽だからこそ知る古き良き価値を大切する「～逆転の発想～前に進むだけでなく、立ちどまることも必要である。」③参加型、手づくりを大切にしてきた「キャンドルの灯火ひとつに、手づくりの温か

さが感じられる」④のべ2000人を超えるボランティアでイベントを維持することで感動の共有や友情が育まれる「ボランティアスタッフの目には見えない努力がイベントの原動力、の4点である。

座学講演の後、参加者一同で雪あかりの路手宮会場にて実際にオブジェの作成にあたった。

以下、所感を述べる。

小樽雪あかりの路が長きにわたって観光客の心を掴んでいる背景として、地域住民が手づくりでイベントを盛り立てているというストーリーが来場客にきちんと伝わっていることがあるのではないかと感じた。来場客が小樽市民の心意気に触れる糸口として機能している分、来場客が「また来たい」「応援したい」という心持ちになるのだろう。この「共感の連鎖」が単なる商業型の観光イベントと大きく一線を画している部分である。また、住民の側もイベントへの協力を通じて観光客を喜ばせるという体験をすることで、地域への愛着いわゆる「愛郷心」が深まっている点も大切な点である。さらに、韓国の大学生など海外からも運営ボランティアを募ることで国際交流の素材として機能している点も見逃せない。単なる観光ではなく、地域の住民と一緒にひとつのイベントを作り上げる体験は国際交流のメニューとしても大変有意義な機能を果たしているものを見受けられる。

観光客を地域に呼び込むイベントの在り方が全国各地で行き詰まりを見せている背景として①開催内容のマンネリ化②担い手の不足③観光客のニーズとの乖離④観光は観光業者が担うもの—という住民の非協力的な意識などがあると見ているが、小樽雪あかりの路はいくつかの答えを教えてくれている。まずは、観光に関係のない地域住民を町内会やボランティア団体を通じてイベントの開催に関わってもらい仕組みが出来上がっているということである。この手法は、網走市においても網走マラソンや流水まつり、フラワーガーデンはな・てんと等も類似していると思われるが、関わる住民の「参加満足度」や「感動の共有」をきちんと実感していただけているか否かが小樽雪灯りの路との大きな相違点である。その点において、参加したボランティア同士の交流、懇親の場を積極的に設けている点も重要である。次に、マンネリ化や担い手の不足を打開する意味でも、海外からの観光も兼ねたボランティア参加の受け入れという形で外部の力をうまく取り込んでいる点も特筆に値する。人口減少に直面する地域において、観光イベントを手づくりで行おうとするとどうしても同じ顔ぶれで担うというケースに陥りがちだが、そこを逆手にとって、海外からもボランティアを募り、新たな視点を組み入れながら観光イベントとしての魅力をアップさせている点も大変参考になった。一方で、地政学的な面で言うと、札幌という大消費地との距離感や国際線が集まる新千歳空港との距離感を網走の環境と比

較した場合、小樽は有利な環境だからこそ年間 50 万人前後の集客が可能なのではないか、との思いも持った。人が動く→受け入れる素材を充実させる動きも盛り上がる→住民がコミットすることでさらに魅力が高まる→その魅力にひかれて人がさらに訪れる、というサイクルもあるわけで、北海道内 7 空港の一括民間委託を受けて、道内航空路線の充実や女満別空港への近距離国際線の誘致、JR 北海道の札幌―網走間の移動空間の魅力向上、道央圏との高規格道路のミッシングリンクの解消等、「人が動く」ための施策の強化も不可欠であると改めて感じた研修であった。

健康なまちづくり推進議員連盟 旭川研修 1 日目

令和 2 年 2 月 13 日（木）15：00～17：00

旭川市健康生活館

参加議員：小田部照

心身共に健康な住民を増やし、もっと健康寿命の延伸や医療費の抑制を図り、持続可能な地域を実現しようとする市町村議員のネットワーク「健康なまちづくり推進議員連盟」の第 2 回目の研修が旭川市内で開かれた。

初日は地元、旭川市議会の松田卓也議員が実際に活動をされている「心の健康」を実現するためのお茶やお花などの体験を行った。これらの取り組みは、茶道や華道といった形式を重視したものではなく、美しいものに触れることで心を豊かにしようという取り組みの一環だという。日常生活でとかく忘れられがちである憩いや心の平静を、お茶を飲んだり、簡単な生け花をしたりすることで取り戻そうというのが狙いである。体験を通じて、各地から参加した地方議員とともにゆったりとした時間を過ごすことができた。網走市内においても老人クラブや高齢者ふれあいの家では、毎回のコンテンツがマンネリ化しているという話も聞いており、簡単なお茶やお花を体験メニューとして提供できれば、事業そのものの魅力が向上するだけでなく、お年寄りの心に潤いをもたらすことが出来るのではないか、と感じた。

健康なまちづくり推進議員連盟 旭川研修 2 日目

令和 2 年 2 月 14 日（金）10：00～12：00

旭川市障がい者福祉センター「おぴった」

参加議員：近藤憲治、小田部照